

★ はじめに

学級経営には、安定した状態と、不安定な状態があります。

安定している学級は、子どもが落ち着いて学習に向かうことができており、教師と子どもの関係が良好であり、子どもと子どもの関係も良好に構築されています。

そのような学級には、学級の力をさらに高めていく手法が必要になります。一方で、不安定な状態の学級では、子どもは騒がしいか、あるいは冷めきつており、学習に前向きに取り組もうとしません。

教師と子どもの関係は悪く、子ども同士の間柄もありません。

そのような学級では、学級の力が落ちる一方ですから、下降を食い止めるような手立てが必要となります。

効果的な実践とか教育技術というのは、学級の状態によって異なるものなのです。

私が学級担任をやっているところは、学んだ学級経営の実践を、片っ端から取り入れていました。

学級の状態にそぐわない実践を取り入れてしまうことで、むしろ学級がうまくいかないことも多くありました。

そこで、学級経営には2つの種類があると結論づけました。

それが、「攻める学級経営」と「守る学級経営」です。

「攻める学級経営」では、ある程度学級が安定している状態から、さらにその状態を高める手段を講じます。

「守る学級経営」では、学級が不安定な状態から、崩さないようにしつつ、少しでも安定させるための手段を講じます。

本書は「攻める学級経営」についてその手段を提案します。

この本を読むことにより、次のような効果が期待できます。

- ・教師のリーダーシップが正しく発揮されるようになる
- ・子どもの怠惰な行動を引き締めることができるようになる
- ・子どもの悩みに向き合えるようになる
- ・パフォーマンスについての意識が変わる
- ・子どもを伸ばす授業がつけられるようになる
- ・学級を組織としてまとめられるようになる
- ・学級力を底上げできるようになる

子どもたちの力を今よりもっと向上させていくためには、手立てが必要です。本書を通じて、子どもをさらなる高みへと引き上げていきましょう。

はじめに..... 1

第二章 リーダーシップを発揮する..... 9

- 1 ― 「お友達先生」にならない
- 2 ― 賢い教師になりつつ、気持ちをもくみとる
- 3 ― 情熱をもつ
- 4 ― 哲学をもつ
- 5 ― 哲学を語る
- 6 ― 哲学を体験させる
- 7 ― やり抜く力を育てる
- 8 ― 子育ての4つのパターン

コラム1 健全な笑いが起こるか

第三章 厳しく要求する..... 47

- 1 ― 局面指導を心がける
- 2 ― 物分かりの悪い教師になる
- 3 ― 子どもたちの潜在的危険性に気づく
- 4 ― やるべきことは、やらせよう
- 5 ― 間接的な方法を考える
- 6 ― 「やり直し」の有効活用
- 7 ― 叱るのではなく、説明する
- 8 ― 認めていないサインを出す

コラム2 育っている学級は幼くなる

- 1—子どもの「ほめられ方」が成長を左右する
- 2—個別で話す時間をとる
- 3—困っているときは親身になる
- 4—学級通信で伝える
- 5—ペンタブレットをこころがける
- 6—ありがとうノート
- 7—成長ふせん
- 8—カルテを用いる

コラム3 子どものせいにしすぎない

- 1—ジェスチャーの教育的効果
- 2—子どもとの距離を変化させる
- 3—表情をつくる
- 4—3つの声を使い分ける
- 5—エンドルフィンを出す
- 6—子どもを笑わせる
- 7—教師がおもちやになる
- 8—ハプニングでも動じない

コラム4 同僚の名前の呼び方を正す

- 1—外部の人を巻き込む
- 2—フィードバックを保証する
- 3—勉強が苦手な子どもにこそフィードバックが必要
- 4—単元前にしかけをつくる
- 5—1つの授業をいくつかに分ける
- 6—子どもを位置づける
- 7—どうすれば授業力は向上するのか？
- 8—毎朝暗唱をする

コラム5 シャドー授業

第六章

自治的な組織をつくる

171

- 1 ― 自治的な組織づくり5ステップ
- 2 ― 核を育てる
- 3 ― 「2・6・2」の法則
- 4 ― 班長会議をする
- 5 ― 係活動にミッションを与える
- 6 ― 子どもがケンカを仲裁する
- 7 ― コーピングで引き出す
- 8 ― 協同的な学びをつくる

コラム6

自分の武器を生かす

第七章

学級力を向上させる

205

- 1 ― 教師が行動で示す
- 2 ― 苦しい状況ではリフレーミングを
- 3 ― 「We」を主語にする
- 4 ― 教師の経験を語る
- 5 ― 笑顔の練習をする
- 6 ― 問題を学級に投げかける
- 7 ― 作戦名をつける
- 8 ― TPOを変える

おわりに

230

第二章

リーダーシップを発揮する

★1 「お友達先生」にならない

●信頼関係を結ぶ前に厳しい先生であれ

攻める学級経営を実施していくに当たり、まずは教師のあり方から考えましょう。教師の中には、子どもとの距離をできるだけ縮めようとして、「お友達」から始めようとする人がいます。

「厳しい叱責なんて、とんでもない。まずは関係性をつくるのが大切なのです」などと言って、優しい教師になろうとする。近所のお兄さん、お姉さんのようになるのです。

特に、教師になったばかりの若い先生によく見られる傾向があります。

でも実は、これはかなりの勘違いです。

「優しい教師」はキケンです。4月の時点で、子どもから「今年の先生は優しいんだよ」などと言われるようであれば、かなり危ないと思ったほうがいい。

優しさに徹する教師の中には、「子どもに気に入られたい」がために、優しくなろうとしている人もいることでしょう。

でも、子どもに気に入られるようにしたければ、「優しい教師」ではいけない。むしろ、厳しさのほうが必要なのです。

考えてみましょう。

子どもたちが、学校生活の中でもっとも「おそれる」ものは何でしょうか。

いろいろとありそうですが、代表的に考えられるのは「いじめ」です。

子どもは、いじめによって、心身を傷つけられたくないと思っています。

そこで子どもは教師の動きを見えています。見ながら次のように考えています。

「この先生は、私がいじめられたときに、厳しく叱っていじめを止めてくれるだろうか」

もしも先生が優しくして、みんなの言うことに迎合するような態度ばかりを見せていたとして、そんな教室でいじめが起こってしまったならば……

自分を守ってもらえません。いじめられてしまうかもしれません。

したがって、その先生のことには「信頼できない」ということになってしまいます。

学級崩壊なんかも、そうでしょう。

ヤンチャな子どもが暴れ出したときに、教師が止めてくれるかどうか。

教師のリーダーシップのもとに、教室を安定させてくれるかどうか。

安心して過ごすことができるかどうか。

子どもは、そのような教師の統率力を見ているのです。

学級の中での「警察官」のような役割を担えるかどうかを、子どもは観察しているのです。

だから、優しいばかりの教師でいては、「頼りがいが無い」ということになってしまいます。

子どもは、教師の厳しい指導で、教室に秩序をもたらせてほしいと願っています。

秩序の安定した集団の中で安心して一年間を過ごしたいと思っています。

子どもを守り、秩序を保てるようにするために、まずは「厳しい教師」であるべきでしょう。

◎ 厳しさに「楽しさ」をプラスする

ただし、厳しいばかりでいるのも問題です。はじめから小難しいような顔をして、堅い小言ばかり述べる教師であれば、これはこれで、子どもが離れていってしまいます。

「今年はおもしろくない一年になりそうだ……」と感じさせるのもよくありませんね。

動文化に慣れ親しんでいる今の時代の子どもの惹きつけるには、「おもしろさ」も必要です。まずは厳しく。

その上に、おもしろさを加える。

そういうような感覚でいるといいでしょう。

まとめてみると、子どもの認識としては、次のいずれかのようなればよいということになります。

・ おもしろいけどこわい先生

・ 厳しいけど楽しい先生

はじめは、厳しすぎるくらいでもいい。

後から「優しい先生」になることは可能なのです。

でも、後から「厳しい先生」になるのは相当に難しいのです。

優しい姿に関しては、後々からちよつとずつ見せていくようにしましょう。